
双子の二人「セカンド」

レイン氷花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の一人「セカンド」

【NZコード】

N4084D

【作者名】

レイン氷花

【あらすじ】

双子の高校生、紅と蒼。紅は貧血持ちで生まれつき病弱の天才少年。蒼は運動神経抜群で、妹思いな少女。一人揃えば最高！？

(前書き)

またまた書いたんで、読んでくれたら嬉しいです。

レイン

「お兄ちゃん、ここはどいつもするの？」

「紅、ここはこれであつていいのか？」

「これはこうやって解くんだ。蒼、それ少し間違つてる。」

「ありがとお兄ちゃん。」

「あれ？ あ、1が抜けてたよ。」

「そう、それが正解だ。」

「お兄ちゃん、教えるの上手だね。」

「紅は教師の才能があるな。」

「どつも。」

俺は今、蒼と桃に勉強を教えていた。今日は土曜日で、蒼は膨大な量の宿題が出されたから、俺を頼ってきた。桃は、最近授業についていけなくなつた為、勉強を教わりに来た。俺はと、宿題は金曜日の内に、10分で終わらした。

「やつと数学が終わつた」

しかし、最近は何かだるいんだよなあ。

「ホホホ！」

「紅？ 咳大丈夫？」

「お兄ちゃん、風邪引いてるの！？」

「いや、これはたまたま出ただけだよ。」

「ゲホッゴホッ」

「紅？風邪、引いているんでしょ。」

「お兄ちゃん無理しないでよ？」

「おいおい、まさか本当に風邪引いたのか、ゲホッゲホッ、くそつ
引いてるよ…。」

「ちゃんと安静にしてね、紅。」

「お兄ちゃん、私達の勉強は後ちょっとだから、ね？」「
はいはい、分かりましたよー。」

あ～あ、折角の休みに風邪引いたよ。

俺はそのままベッドに歩いて行き、倒れる様に寝た。

（1時間後）

「ん？何だ？」この柔らかい感触、は！？」

俺が起きてからの第一声はそんな感じだ。

何故なら、俺は仰向けに寝ていて、両サイドからとても柔らかい
物に挟まれていたのだ。

「うう？あ…、お兄ちゃん起きたの？」

「おっ、やっと起きたか？紅はお寝坊さんだな。」

「え～と、まず、俺が今置かれている状況を説明して貰いたい。」

「おいおい、何かこんな展開前にもあつた気がするぞ？」

蒼は、何故か全裸で、桃は、パンツ一丁だ。

「クスクス 紅が寝ているから添寝したんだよ？」

「お兄ちゃんが寒そうにしてたからだよ？」

蒼め、桃まで仲間に引き入れるとほ恐ろしい。

正直、蒼と桃に添寝されると、堪りません

桃の発達中の胸が当たつており、気持ち良ぐ。さらに、太もものモチモチという感触が下半身から伝わってくるといつこのポンボはハツキリ言って卑怯だ！

一方、蒼は体を密着させ過ぎて、いろんなものが当たつてこる。いわば、ジョーカーだ！

「お兄ちゃん？顔赤いよ？」

「いや、気のせいじゃねえか？」

「紅、頭から湯気出でるぞ？」

「気、気のせいだ！」

「お兄ちゃん、体温計つて見て？」

「お、おつー！」

。。。。。

「え？39度1分！？」

「紅！急いで病院行！」

「お兄ちゃんのタオルすぐ熱いよ！」

ああ、何か、意識が薄れてきたな。てか、このパターン前にも、あつた、よつ、な……。

俺の意識はここで途切れた。

「何か、このパターン前にも見た事あるぞ。」

「紅、起きてからの第一声がそれって、まだ熱でも在るのか?」「いや、無いな。」

「念の為計るよ?」「好きにしろ。」

「うん、結構下がってるね。」「ふうん。」

「嬉しくないの?」「いや? そう言う事、じゃ無いんだがな。」

「? どう言う意味だい?」「また、病院かよ。」

「仕方無いだろ? 紅が氣を失うんだから。」「今何時だ?」「5時12分。」「桃は?」「トイレ行つたよ。」「そうか。」「ガー…、ガタン。」

「お兄ちゃん起きたの!?」「おうよ。」「良かつた。」「紅、僕はちょっと飲み物を買いに行くよ。何か飲みたい物はあるかい?」「いちごオレ。」「分かった。桃は?」「あ、私はメロンソーダ。」「OK。じゃあ行つて来るよ。」「ガー…、ガタン。」

「お兄ちゃん起きてて大丈夫なの？」

「大丈夫だ。」

「お兄ちゃんは昔から無茶するよね？」

「やうか？」

「やうだよ。」

無茶してゐつていう感覚、余り無いんだよなあ。

「お兄ちゃんは、昔から自覚が無いせいで体を壊しやすいんだよ？」

「おっしゃる通りだ。」

「分かれば良いんだよ？」

「はいはい。」

「はいは一回。」

「はい。」

「よひしー。」

俺は昔から誰かに心配をかけ過ぎたな。

本当に反省。

「お兄ちゃん？」

「ん? 何だ?」

「熱が下がつても寝ていた方がいいよ。」

「ああ、そうか。」

「お兄ちゃん、眠たい?」

「少し。」

「じゃあ、眠れるように子守歌歌うね?」

「ああ、すまない。」

桃が子守歌を歌つてくれた為、直ぐに意識が夢に落ちた。

不思議な夢を見た。桃と蒼が幸せそうに、俺と一緒に眠っている夢だ。

次の朝、俺は退院し、家に戻った。
そして蒼と桃が、退院祝いとして、添寝してくれた。
俺はまた体温を上昇させた。

何もかもが、幸せ過ぎて、俺は、何か大切な物を忘れようとしてた。でもこの一件で、忘れずにすんだ。

俺は、一人の事が好きなんだ。

(後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございました。出来れば、評価をしてね レイン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084d/>

双子の二人「セカンド」

2011年1月19日04時13分発行